名寄市立大学の窓から～知への誘い～

vol.16

「地域と大学の相互的活用モデルの創出」

－地域と大学が共に発展する意義とそれを促進する条件－

保健福祉学部　社会福祉学科　教授　瀬戸口　裕二

名寄市立大学は、人口規模3万人弱の自治体が設置した希有の公立大学として、その存在の意義や発展の独自性を、地域と共に創出していくことが求められている大学です。

専門領域が「障害科学・障害児教育」で、着任から3年半しか経たない私が、改めて標題のようなことを考えていこうとしているのは、私自身本学への異動の動機がそこにあったからです。

「小さなまちの小さな公立大学だからこそできること」「まちと共に発展していく大学」こそが、私にとっての最大の魅力であったわけです。

名寄市は「住みよさランキング2013」（東洋経済新報社）で、道内1位を達成しました。

「住みよさランキング」は、「安心度」「利便度」「快適度」「富裕度」「住居水準充実度」の総合として、ランキングが決定されるものです。

例えば、対人口比病床数や65歳以上人口比介護施設定員数（対前年比で大きな向上を示した安心度の評価基準）などの数値データを総合して示されるこれらの結果が、住民の実感としての「住みよさ」に直接結びついたものなのでしょうか。

住民の実感としては、自らの経験や伝聞などに基づく質的な側面の方が重要なのかもしれません。「数値としての住みよさ」と「実感としての住みよさ」が一致したときに、初めて「住みよいまち」が認知され、強力に発信されていくものです。

交通の利便性の低さや企業誘致の困難さなどを抱えた地方都市にあって「住みよさ」はどのような効果をもたらすものなのでしょうか。

そのひとつに転出入人口が挙げられます。転出人口に対する転入人口の増加が人口増を生み、それによって、産業の乏しい地域の新産業創出（企業誘致や特性をいかした独自の産業）につながる可能性があります。

名寄市は、ほかの自治体に比べて転出入人口が大きな都市です（下表参照）。ここでもう一つ重要な要素が「転入動機」です。転入動機の高い市民こそが都市を活性化させる人材ともなる存在です。転入者のうち、毎年200人程度が積極的に名寄市立大学を選択してきた学生です。自衛隊、公立学校教員、広域異動を伴う官公庁・企業などで占められる転入者の「転入動機」においても、名寄市が積極的に選択されたものであることが望ましいということです。

就職先決定や人事異動において、名寄市の「住みやすさ」が積極的な要素として作用し、「転入動機」に結びついたものであれば、定着人口や次の転入人口の増加につながるのかもしれません。「住みよさ」そのものが、企業の展開意欲につながる可能性もあります。

「住みよいまち」から「住みたいまち」への質的転換とその強力な発信によって、「実感としての住みよさ」を生みだし、まちの活性化や発展がうまれることに期待したいと思います。そのために地域と大学が目指していくこととその構造および条件について、専門領域を通して2回に分けて考えたいと思います。

転入転出率（道内34市の上位６市）

千歳市子育て支援計画－千歳市次世代育成支援対策推進行動計画－（平成17年）より
※転入転出率＝ 年間転入転出者合計人数 ÷ 総人口

順位	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年
1	札幌市 15.80%	札幌市 15.40%	札幌市 15.10%	札幌市 15.10%	札幌市 14.70%	札幌市 14.70%
2	千歳市 14.70%	千歳市 14.10%	千歳市 15.10%	名寄市 14.60%	千歳市 14.30%	千歳市 14.30%
3	名寄市 14.70%	名寄市 13.90%	名寄市 13.80%	千歳市 14.50%	名寄市 14.10%	名寄市 14.20%
4	留萌市 13.50%	網走市 12.70%	留萌市 12.60%	留萌市 13.20%	網走市 12.80%	留萌市 12.80%
5	網走市 12.70%	留萌市 12.70%	網走市 12.30%	滝川市 11.90%	留萌市 12.30%	網走市 12.10%
6	滝川市 12.50%	滝川市 12.00%	滝川市 12.20%	網走市 11.80%	滝川市 11.50%	滝川市 11.70%

このデータは、他地域との人口の流動性の高さととらえられるものだと思います。
その多くが、定期異動などですが、定期異動の多さは、一定規模以上の事業体の多さを示すものとなります。
また、人口動態上は、流動性の高さが地域活性度を示す指標ともなっています。